六家集

拾遺 十六七 終

和書門
類 號 二八一三七
函 一六
架 八
冊 一

内閣文庫
和書
類 號 二八一三七
函 二〇一
架 一七
冊 八

内閣文庫
番號	和 28137
冊數	18(　9)
函號	201 528

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

拾玉集巻第六

四季雜各廿首都合百首

詠百首和歌

春廿首

内閣文庫

明治十五年購求

国立公文書館
National Archives of Japan

又月夜のこゑはあはれ夜半の月はきこゑに都にこえ
なかしまとへ宮見夜半のまにほとしての秋見白露
河社ありて川の流しさやかつく猶見あくらん
荻すかつく秋をそくあまたみえ松風もとこ小萩の
夜すからさ秋にはくまいゆかねと露い秋ちる妻乃下
うきあまの夕をは秋のかゝあかくゝ風わよいそまぬ萩のに
夕あくれ物ゆふ夜いかさに水はけに秋ちりしふゆ
都にかく一こ見花まくれは秋すれしよ見ちねよ
夜かつるゆく乃もし人見すかこ夜消えても秋をこそ

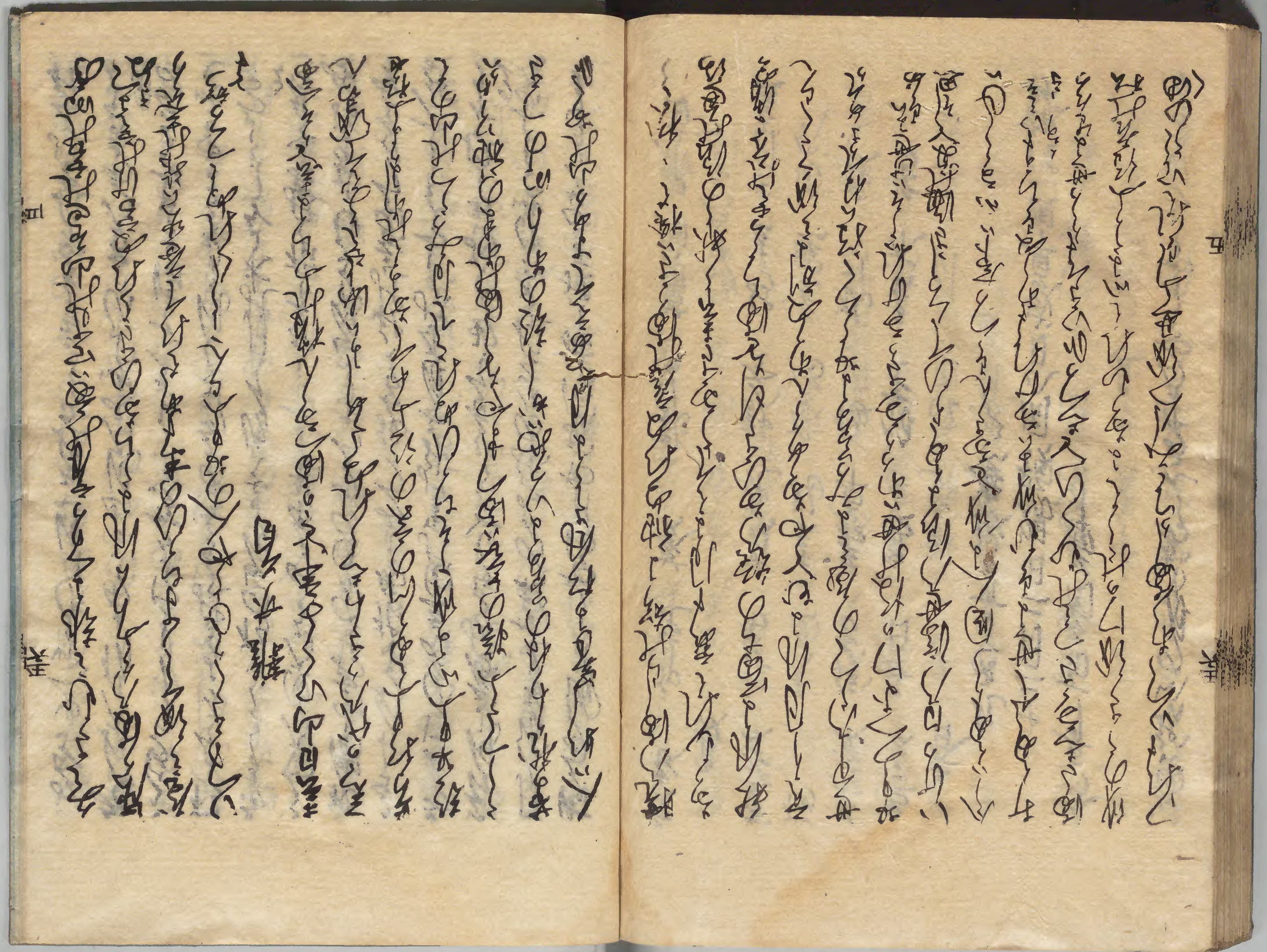
秋夕月　考曰一首多之

あらそ秋とまたつかるひゆるゝ見て物思ふ鐘
こよひの夜見えまされあらんとも露に秋乃ゆふかせ

名とゆふ秋乃見えいつりけふまてそこはあはれ哀なれ
草葉にをしつゝかれにけりをも哀をくゝも見る
ひとつさへ乃けしき見月のをよりまみにもそ行
秋の世はいか哀にくまさ月はれてくゞ萩かさり
秋とふ人てゝ行くゝ萩の秋はてもいせへの哀
せへてよりきりしの色にけれ露くみ秋の哀は
いわかさにせへの露にかさいもさて風露
あふれ秋にちられは哀とさくゝ夜のまの
わかれあれとひとりの人の都萩の夕かせ
きかにわれそのりの露ぬれ月をくこゝろかれ
いつまん伏見のきみに風ひのかよふ世
さつのあの秋風きのゝ松かせにつゝ夕くれの

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan



いつれも我心の月のあきらかならんやうにおもひてよみ侍るへし

秀哥百首草

十二月二日賜題同八日成草但一注課歌

凡此ゝ可縁應ゝ

春

立春　子日　霞　帰鴈　春水　鶯

若菜　残雪　若草　梅　柳　蕨

桜　春雨　春駒　梅鴈　春曙　苗代

菫菜　杜若　藤花　款冬　暮春　三月盡

夏

更衣　卯花　葵　郭公　菖蒲　早苗

夏草　照射　五月雨　盧橘　蛍

鵜川　夏夜　夏衣　晩立　蚊遣火　蓮

氷室　泉　荒和稜

秋

立秋　七夕　荻　女郎花　薄　苅萱

蘭　萩　稲妻　鴈　康　虫

霧　鶉　槿花　駒迎　月　擣衣

菊　紅葉　暮秋　九月盡

冬

初冬　時雨　落葉　霜　枯野　霰

雪　寒蘆　千鳥　氷　水鳥

網代　鷹狩　炭竈　埋火　佛名　歳暮

除夜

此題思難〻ふ審に百首御詠題おほ遂て子細なき

十月二日被召百首不て交地歌皆進する秀歌ども

作者十五人

御製　前太政大臣　右大臣　内大臣　前大僧正

前大納言　大宮大納言　左近衛督　大宮宰相中将

行経朝臣　家隆朝臣　雅経朝臣　泉宗朝臣　家長

秀能

春廿首

春きのふくれしのよはのさむしろにさそてたえてさきも花のいく人

のけれ今いつとかしもまて春の川原にたちかはる風

まつゆきそ門のてうちとけむ山松霧にかすむ春日のかけ

とりあへぬ人の衣も氷とけ今朝さそひのくれはさき春の山風

さと遠みしらぬつらさもしらさりきおそくもわかつゝ花の色

しつかなるまつのこそしかるを千年の聲い秋のおくそたれ

人しれぬなかまる乃かね宮の色く春めく衣の春藍

雅経のことのくみやぬるあかき枕に春のなかまに春風吹

春あけ乃竹もしみわけしたる霞さくらそ花にさとりるゝ

秋のたゞ霧こそあり月けのもえみの雪とりかそきさけき

みよしのやむかしの花のさそひ乃雪ともおのれ春のかつら

見よしのの花鳥に樹にむかしむかしそ花もけふこそ流れ

春山のおも春のとくわけてあまけのむかしそけり春山風

ふれはいかん木のかけしめてみよや花にほふ梢のかすみ　有家

春山の梅や花の霞にかすみけんいつも色こそあかぬ　秀能

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

厭離歌百首

流轉比丘往生上

いとひても猶すてかぬる世中をさてもいかにと我心かな

ねかひても猶ねかはるゝ後世のためすてゝそしらぬ秋の月

浮世をはしれともまよふ心こそ秋の夕の風をしるらめ

すみなれしいほりもしらぬ山里にさやかにてらす秋の月かな

みてもなほあかぬ心はさえわたるたそかれ時の空の色かな

いかにせよとて此世に住ぬらん人の心の奥そしらるゝ

我心にかはりてなとかなしかるらんさらぬ別はまさる物かは

なにはかりさはかはらぬ世の中にすみかはるかの山の端の月

出る日の影はかなくて世をすてゝ袖の露をはらふ秋の夕暮

誰かはしらむ人の心の秋風をなにゝたとへてなけかさるらん

秋の夕は人の袖にもやとりけるあはれはかなき夢のよの中

いつまてか此世にすまんかはらしな秋の夕の風の音かな

あはれさもしらすや秋の露ときえてかはらぬ人の身のうきかな

思ひ入る心の奥はしらねとも袖にかゝれる月の影かな

いかにして浮世をいとふ身なりとも秋の夕はかなしかりけり

君かたのむ心のうちのはかなさよこの世の月にかゝる雲かな

いかにせん身はいつまてか有明の月の雲間の秋の夕暮

われもまた月の出るを待かねて人の心の奥山の月

浮世をはしのひて秋の夕暮に袖にちる露の玉かな

いかにしてなかめわひぬる秋の夜のつきせぬ物をおもふ我身は

秋はなほ夕の空のあはれさにいく度袖の涙そふらん

日のかけもいつかはてなむ山の端の月にかゝれる秋の夕暮

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

春のみあれのへ頃やしけに語言にゆかりまて無えさ
たりとらへて眺むる神代もあれなきつるは佛のためにもよ
あまくにへ思ふにかやうなる事なき御後のことはりあるさとにて
六十調しへ下さるれとなおかしくさに名葉と山花への月
いかそ押りひしけまはつれともへさしへいとくし
伊しかさらうらさきひかすて繁がる伝此ふへもあ何添
起る山や海のありさまあらはさのてし浪れ雨らへあそ 悩伝
小のひとしよ金山海会大迦大師けしうてり世るよしあるよ
康元二年十月十四日明円心陰頃右秀筆
詠卅八首経一宿翌日十又日之朝念
仏之後披日之安否推同者也

百首句題

雪中早春

雪ふかく春は添きと一とせに二たひこしつる年そかはらん
とはきあれしところ春は霞みて雪見ゆへくさまさるらん かきくもれ

水郷朝霞

うら風さきまの門にあけしの霞はしまよ嵐のをの磯
かのくにはさはふれとこえあてて霞はかすむらん此川浪

野外晩霞

たつすみまくらの上のつかまた秋とそ見ゆる夜かへる

若菜

けふたにはわかなつむとやりやすまぬるかなも若菜なし

竹籬聞鶯

国立公文書館
National Archives of Japan

浦邊春月

月影乃あかれぬ春乃夜ハ霞よりこそしはしやとらん

遊砂鶴

山吹乃あかあかひさかりにてそのそれ河なみのさそひぬる人

遠岸落花

かちさらくあかつきかけ乃花のをみ松よりわたりにさきけれ

三月盡

行春の住む湖まて今や霞の夕くれなゐ

夏

藤暮初紅

夕くれにひきけるそのよは花の春ならぬ藤も夏へそかよふ春の月日の

久保勘左

徒ついてりおもへはかり勘左今ハ山河のすもて見えん

あかつ勘左

勘左あかつのえまく見えるあやしきまとの秋のたえなれ

船中勘左

勘左とのきにこまて山花かうりゆく身はおもひろこそ岸の色

盧橘薫簷

せりへくまひかくてあくさしろもさまむれ秋に花の白き

夏夜早薔

あつくおもけのとささ夏見えるたいあつのひさし立夏

澤邊菖蒲

人乃花花乃あやめふるあやめの沼へと移えてまし

山家夏月

国立公文書館
National Archives of Japan

野径萩風

萩のうへに露もみたれて秋風ハひとり野原ハ吹ふるかな

晩天秋鴈

越かたの空に出る秋の雁かねハつらき雲のひまそとも

遠聞鹿声

さ月りのつまこふ人のいつくれと思ひつゝ聞鹿の声

庭草露滴

今ハそのなれしみにけり庭の面にも露の乱るゝ秋の色

閑居霧深

奥山の風やしかはたされてしか気やすき閑居かな

槿花籬垣

それゆふりの籬にも朝な一時をあさかほの

猿叫待月

我宿に入ぬる月のかけはそれとや思ひてや猿のさけふらん

月照山居

山すみの心をしれる月かけに出てのちも見えける

月海上

わたつ海そ波の上に出る月を見るかなさき月こそ見ゆる

湖上残月

わたの原秋乃月のかげはるゝ浪の名残に月をみるかな

野亭擣衣

わかの浦の波の上に衣うつなり秋の夜の月

よそにのミ聞しもかなしの宿にやすらふ衣かな

野径秋風

されつきしく細田里遠み萩か枝に風の乱れて露もこほれて

龍田山紅葉未遍

おもかけの紅葉時雨よりも色ふかし今年は秋の紅葉そのかね

河紅葉

たつた姫神よりも何か錦とはみなれて川におるらん

秋暮菊花

うつろひて残りの色そ哀なる秋は我身も花もいたつら

冬

初冬時雨

時うつり秋の梢は我袖に時雨もしらぬ涙なりけり

落葉埋水

山かけやけはしりて木の葉定なき時雨なりけり

朝野寒草

朝霜におきまよふなかにあはれなり野辺の草葉も枯にけり

椎柴霜凉

志井柴につもる霜よりなれてうつりそふ朝の霜をきえぬらし

竹間聞霰

風さむみ庭の玉ささ竹のはにおとつれもなき霰なりけり

原上初雪

道もなき野のはらのうへにふるゆきの初雪ふかき霜の跡

檐端雪深

山人のかよふ道にもつもる雪の中にまきれて袂さえつつ

雪中待人

歌人の海にてよふりかへてしこいいそや人の覚要

池上冬月

月けの影もきえやとりえし毛の氷ちて池の氷りと

岸邊冬葦

行方なき岸をこえてあ(り)葉あたりに又あり(さ)まれ

浦邊千鳥

あくらさへ風にたえて(も)鈴かけ(の)浪のりの影ふかし

江水秋氷

行の江にはかよ秋風吹をきてつ井まへる(に)氷とよ解る

葦鶴風聲

みちけし(の)空ゆかへ風なるに汐の沢しはしきゝ

泉水冬

答えてかくもしき(も)池水色冬成富二(の)あまけはらん

古寺歳暮

いつの年もくれてあかぬ梢(も)ちる初瀬山とも又(も)しらぬ夜の

戀

初絹待戀

ゆかしきにおもふ人のなれもや(や)あて(て)床をまちわびし

思續年戀

思われ人(の)又よしなれつゝの恋とそ程(を)もれ日月ならん

契遠待戀

つの恋はいとゝ(も)かくりつゝ(や)(の)あ(ま)(た)さりよしもへ人のつ(らさ)

別不逢戀

なれて(も)恋しかはりし(て)せさへりも(る)有(明)のそれ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

朝覲行幸

[illegible]より山[illegible]

述懐

さりともと思ひし[illegible]人のみ[illegible]

仕顕親書

うれしくも仏の道に[illegible]

略秘贈答和哥百首

吉野山[illegible]

[illegible]

秋

もみぢ[illegible]

月[illegible]世[illegible]

同

吉野山[illegible]

[illegible]月[illegible]山[illegible]

秋

新[illegible]

[illegible]

大

月[illegible]新[illegible]

[illegible]秋[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

同 みほとけ鶴の林をいりまし萌月
の月のいはねかくれ人従者行末さそ
同 くもきりくもりてしみの光のうせ世も月け
きけよ人さらに法花のそれおもてあらんなれ
同 三悪乃家をはなれて見よ、おもしろさ又相成つ
のりしかよ乗りの終と成とは中也以字燒字法話 以て可達成
廣 我尋ねいふ、風そこにまされて弥陀もゆく世をまたくん
すかより只今のくしおの心へ到る下到も夕がへ

月の蔵より浮世の世は人そこにのりて一心にかくしまけむ
同 うきの仲間には人ありての御法を見るかなさしもなき さしかへ人
同 心とは月の光の世はありさん浄めあそてとらゑ 紹見
とうけて人やあかるく人見ぬまとぞ浮世のかり
同 浮り行く見るり一てまとは兵方まうし乾り所
同 いかにそれ一日の月ちりの一あかれしよあいふあり了
何してくに月の月のあふら人世まよへい出てくる夜の
同 生まれぞ欲つきしるいをし人て出るなわら人分け法はれ

国立公文書館
National Archives of Japan

あらたなる年をむかへてけふよりハ千とせの松を人にゆつらんかしこき

世中ハ淡にしあれや浦にまてよ人よ忘れしあはれ

門のおもひ海にこぼれのなみをよ我も見はてばなき世の

人心つゆしらすして人なれハ人とふ持し人のかなしき

おもひ世をうけひし身にわれなく思ひつゝ袖よりぬるゝ涙なし

はかなき世にこそ人あはすなく思ひす事よ我もさぬの

我よはむかしや小野ありけるハゆめうつゝかなる人のよハ

なけくなよ人はかなくさえまかるへのなき捨はてす

はかなさハ此世しかり花ならぬに露しもかゝりける

おもふこゝろさまなつよ出た月のひかるにて入さまにたのむとそあらん

満ありこしなかうハ春に冬ぬれなくて山をかへの花もとし

いそいてたてゆくまゝに花のさきぬれハ世をたてゝ思ひ満らん

以上百首ハ大略併詠決ヲ入レ百首入
撰集ニ稀綴リシテ奉納神居本
具至別草

詠百首和歌　以古今為其題目

春廿首　益謙

年のうちに春ハ来にけりひとゝせを
こそとやいはんことしとやいはん
春日中に春ハ来にけり吉野山さへかすみ立へ霞とや見ん
袖ひちてむすひし水のこほれるを
春たつけふの風やとくらん
春風乃むすふ氷ハとけにけり袖にやよひの（？）
春霞たてるやいつこみよしのゝ
よしのゝ山に雪ハふりつゝ
春霞たてとも雪ハ吹山のよしのゝ山に雪やふるらん
雪の木のめもはるゝかれて
しらくにもことしもかくもちらんハくく
木ゝ志らの光にも里にハしまふきに春霞
くらやしさちやとくさゝさくさく行のん
こひしよしまゝまかくまゝおんての郷
春はまし霞の梢にかもそみえさしもに鶯はなく
あつさゆとして春雨くもりぬわれの
わらくらへおしもけうかすつきてん
春雨乃ふりつゝたちおふるさゝきにそそみなつ露
たらくらけられよりもぬる山中行
お前つくめくゝよりふくこしのかな
こまくらにわくにあらたき西行らてなふかし山桜
鶯のなくさにめそよむ花のつされ

国立公文書館
National Archives of Japan

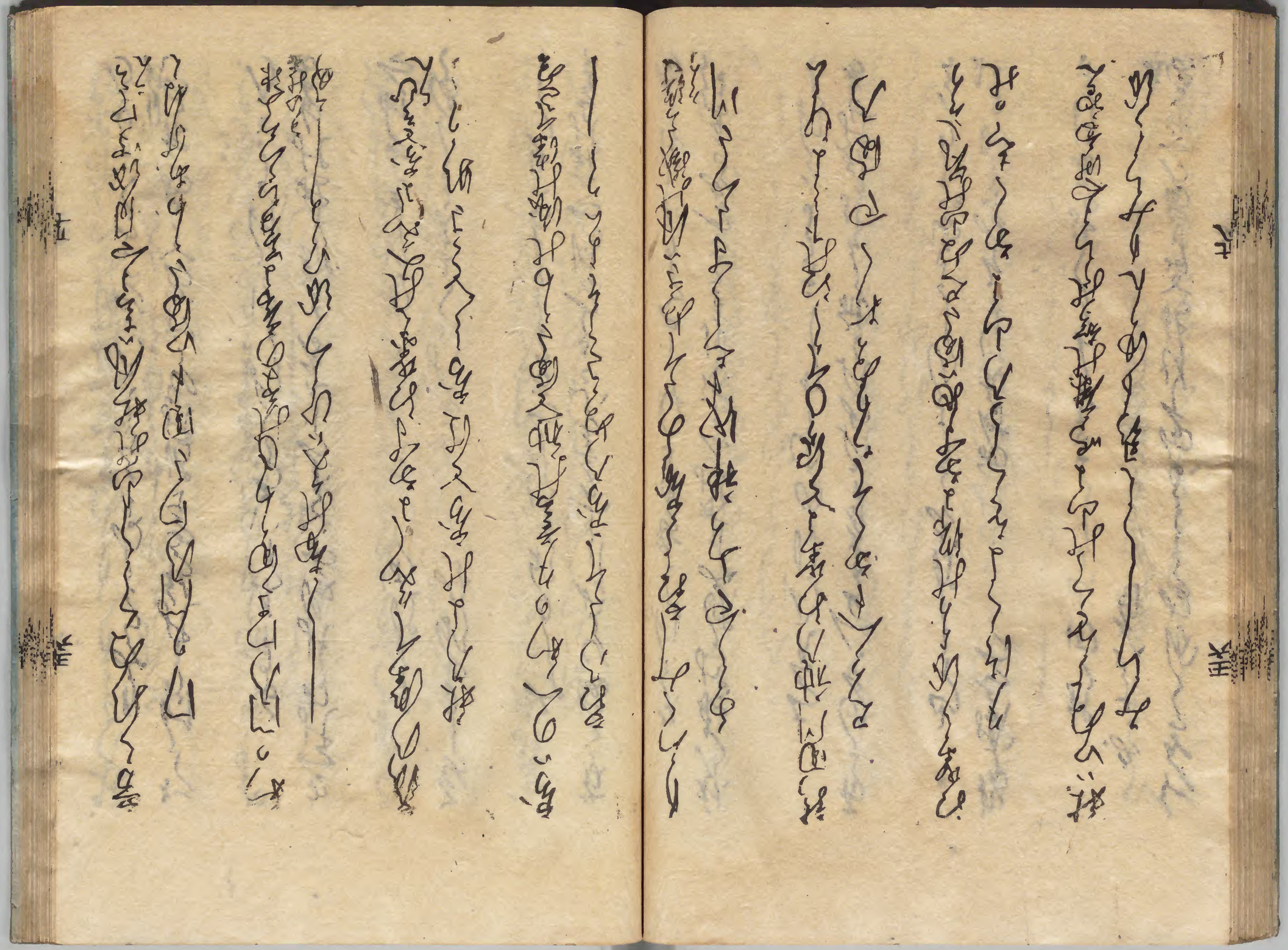
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan



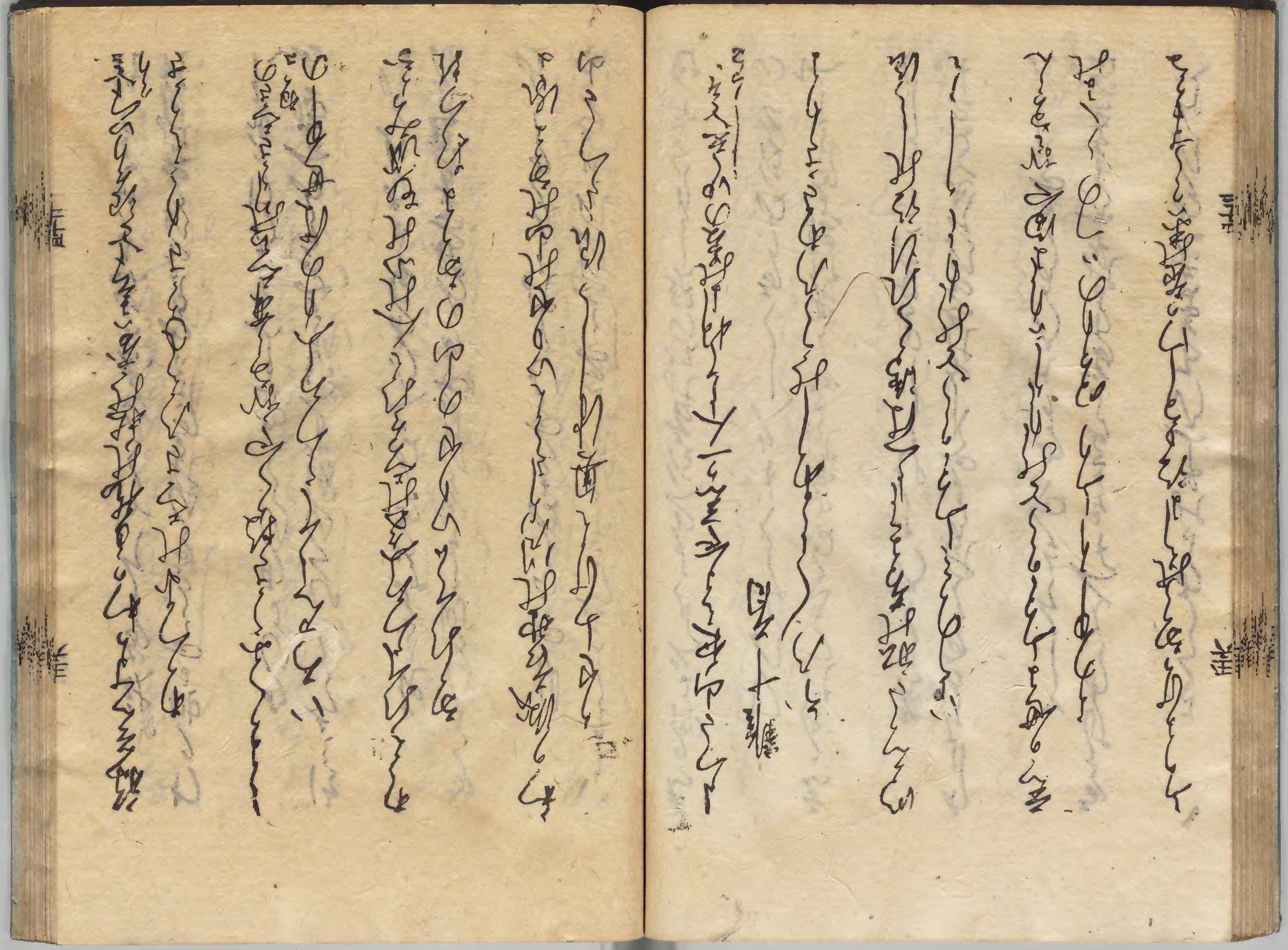
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

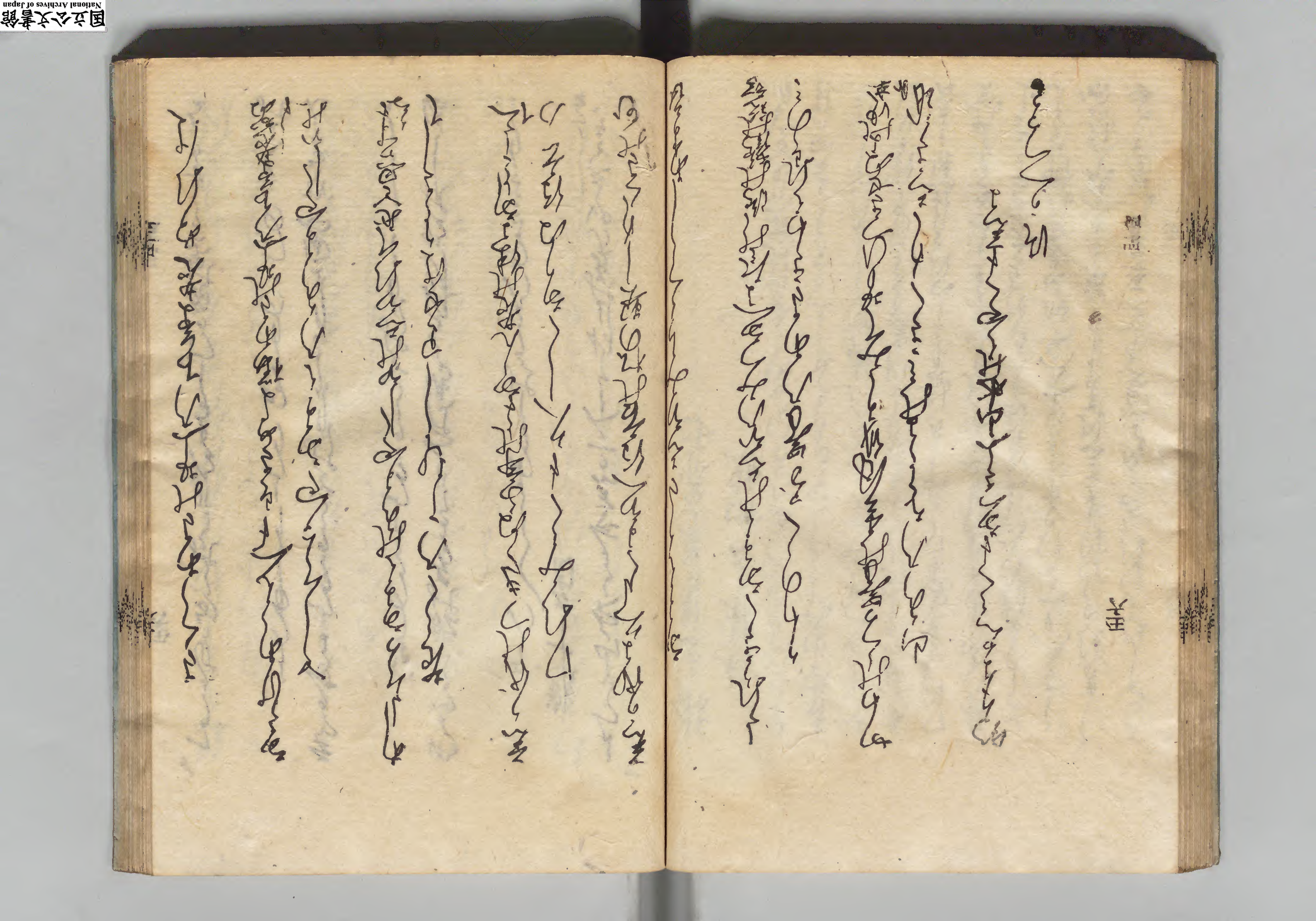
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

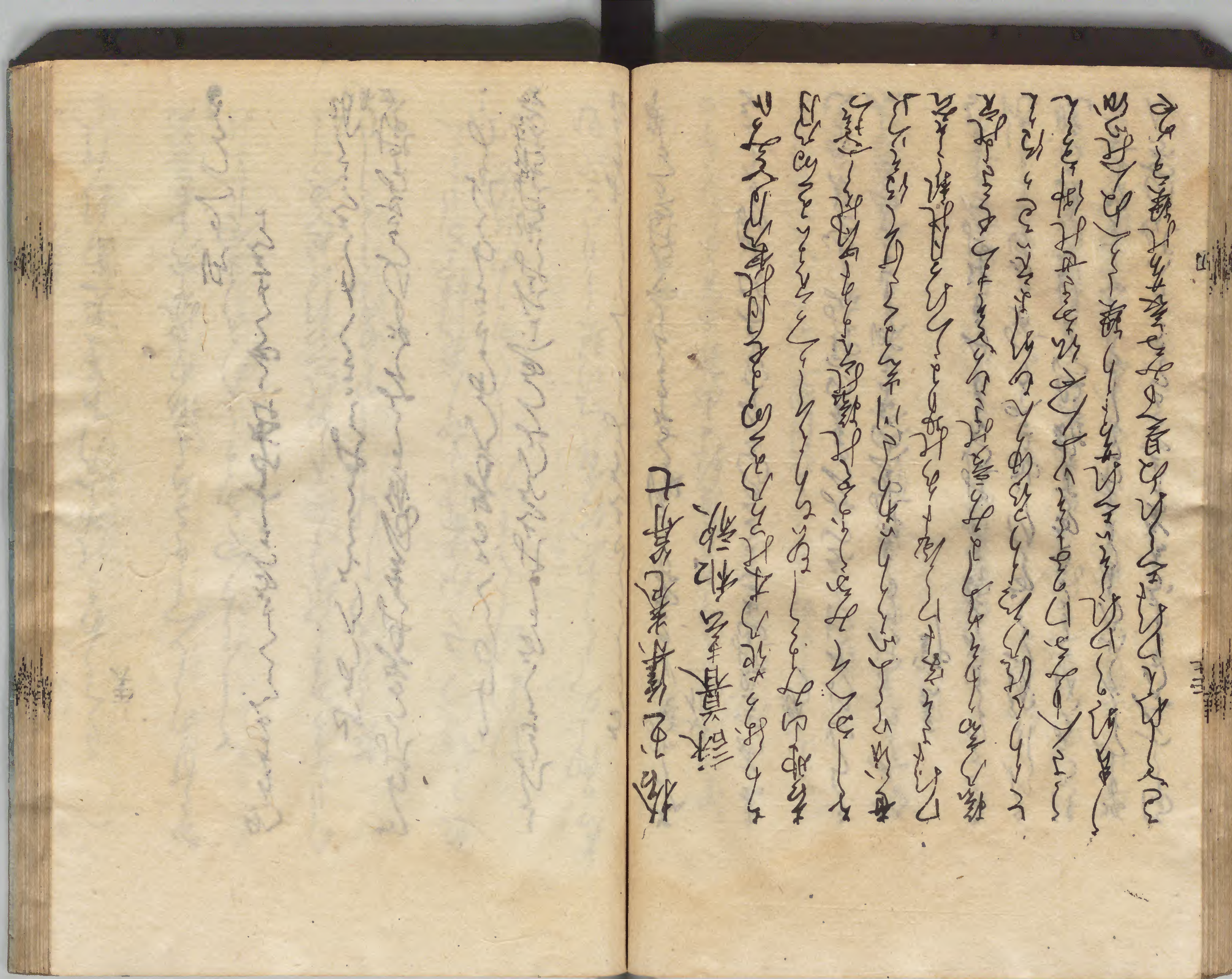
国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

住侘ていつまてこゝろあるへしとおもふにもうらのけしきのあはれなるかの
あさ津なる野わけの風の雨のあとしらつゆむすふみち
風さそふ嶺より川のなかれ行月のさしてみゆらむ

雪

なかめつゝ猶ふかき夜の冬の夜もしらて夜やこゝに月や
庭のおもに雪ふかくうつもれて道たにみえぬさとそかなしき

氷

なかしのかはのきしのよるなみもいつしかとけて川のみつ
ゆふされはこほりしかはの氷ゐてあしまのかせのさむき夜は

雪中子日

小松原むれゐる子日たつねきてそらにしられぬ雪はふりけれ
小松原みとりのいろに花咲てくもゐの子日のかさしてそ見る

霞も宿山

むかしたにまたしらさりし吉野山おほふかすみのやとりにそ見る
春は猶ふみわけつゝ宿りせんかすみにきゆる山のかよひち

夕採菖蒲

あやめかるたもとにかけてさとのこかわかれゆくよのあやめくさ
いくたひかたもとの露やゆふくれのいかにみるらむふかきのきは

獨聞時鳥

いかにせむひとりまちつゝ郭公なくこゑきけはこゝろなくさむ
郭公ひとりきゝつゝねさめしてまつにかひなきよはの月かな

始見草花

みえしよりいろもかはらぬ庭の草花のまつに秋はきにけり
わかやとの草の花さくかたをかにひとりみるらむ秋そかなしき

旅泊暁月

うきまくら波路にならふ月影もはてはなこりの雲の通路

落花清水

なかれ行河のみなかみの花の色を流れてすむやそのかみの風

深夜千鳥

さよふかき浦の松風浪こえてこゑ打そふる袖の浦波

猿声まよふ山のおくのきえぬともその夜の浪のなかれ行

忍年恋

あまたの年もつもれは涙のいろもさそふらん

わか身にまつ我かふかきおもひとしらせしとつけむ

梅竹為友

窓ちかき竹の枝にかよふ梅か香をともとそしるらん

風入るまゝ雛乃竹にかよふらんなれてよろこふ友とそなる

巳上十首一は師木乃題よみおくへきよし

志のはしよみくるしのつゐよしありとて

こゝ又十首詠加俗素秋合十題 化不記を

郭公卯花

なくこゑもかれ山の卯の花さきそふ月はさかれ

暁更夏梅

あけぼのゝよはの名残のまゝのにほひかなかりけり

古池菖蒲

ふるき池のあやめのねふかくていけるかなやのすさ

遠山郭公

山ふかみなくほとゝきすはるかなる遠山の雲に雲の海

汀前夏草

秋ちかく成ぬとしるしや色こき海おもてしらぬ萩の花の

毎夜夏月

夜な夜なにひかりさやけき夏の夜は秋をまつ山の端の月

雨中照射

五月雨の川なみくらきよにも照射の火のほのかにそ見る山

家々納涼

あまた有ける宿のいつくにも川風涼し秋の風

蝉声漸深

なく蝉の声の間に鳴しきる老その木枯にまさる

蛍火秋近

秋の夜のねやのひまにも蛍かなもるる風にかはらぬ

又人にかはりて

卯花

うの花のさかりの垣ねしろたへにさらすかとみる

庭梅

さくら花ちるにも似たり白妙に月まつ宿の軒端の

菖蒲

みくさのみ池のあやめの年ふりて老ぬる庭のはなのかをりそ

時鳥

郭公ふたこゑ三こゑ聞たれは涼しさそふる

夏月

夕立の雲のはれまにさしのほる夏の夜の月

夏草

行出清を見て山のまなつ山路いく夜野はかまに秋風ぞ吹

照射

山かけやしけみにねらふ猟人もまよふ廉ちかつ秋の夜ぞなき

納涼

岩からやむすふ山のまろらむ岩井にをち水庭に松風

蟬聲夜涼

山里の楢の梢に風たえて蟬はよりて夜ふけて此聲

螢火秋近

螢とふ秋の近さを告るなる夕の空はすゝしきかな

献南海漁父秋十首　小山樵客

此ころのくもりも見えて清く行ね有明の月にかゝるそ

空にひかり山のは荻の野原の橋本に風の吹かゝる袖

虫の音もすむ野辺の秋風さへ聞て哀は秋の夜半の寝覚めの

秋来ぬとやかて山の秋の袖さへさえぬるかな風の夕くれ

しらぬ人も心はつくる夕暮に扇のなきに秋の夕暮

夕かへる高瀬の波に流れけり秋の心の夜半のおもひに

さらぬたに秋は心をみたしつゝ夜の山の暮に袖は涙か

山の端の里の夕暮秋の夕すみにあはれのつく

風さらて真葛か原の夕露に秋は夜半の秋の夕

夕露あはれ清よ荻に流し風にもふきそ吹けり

緇素歌合十首　番左將軍御弁

持　禁庭残菊

負　田家時雨

山のはのみくにけは落つかれぬ菊の上にそ色をそふるやみなし

枕しくれ秋風山田も古里はしくるゝ夜半の時雨かな

持　深山落葉

高からぬ嶺乃紅葉は谷に落てふかき秋の色の風

勝　野径寒草

こゑさえし野辺の草葉も色かはる霜さえて冬の野

勝　海邊千鳥

浦遠み鳴くしら浪の暁は松風さへも名古乃浦

負　湖上水鳥

鳥の羽にてはらふもみちるあられ月見るも文夜の

持　旅宿時雨

旅の夜は明かたしくれて寝ぬ人の角田川原に時雨ふる哉

勝　寒夜冬月

冬の夜乃月乃かけあらはれて秋吹くへき庭も寒けれ

持　古渓寒水

あしひきの山の氷とけし谷のさゝ浪の下にたえぬ庭の流れ

山家嵐雪

しかし嵐にあつめて峰の雪もたえす夜はに山里の雪

大納言為定卿冬の時雨去年にかへりて窓哉

十首

林中庭雪

九重乃もゝしきにふる雪よりも我ことはりもあさき跡哉

古山雪

雪はたゝ都のふかきにも入ぬ道古郷の雪をこそみれ人跡なき

山家雪

山乃端乃かけの松に氷りけり雪ふきおろす嵐なるらむ

野亭雪

旅人乃枕乃あたりに薄すゝきおもかけさへも庭の白雪

社頭雪

榊葉にかゝるしら雪うちはらひ幾世かけてか今日の山路

古寺雪

あれにける年ふる寺の鐘の音も昔にかはるしら雪

雪中恋人

人ならぬ人乃心にかよふらん雪ふみ分て来ぬ人をまつ

雪中述懐

雪ならはかくても花に消ぬへき身のうき世には猶そさひしき

雪中遠望

雪ふれは外面に見ゆる峯乃松たゆむ心や山によみ人

雪中旅行

ふるさとの方もかはらぬ雪の中に人をまちつゝ暮るゝ夕暮

春

志賀浦

舟よするしかのみやこの花ならは志賀の花園乃山桜の庭

泊瀬山

春風の花ちらすらん吹おろす小泊瀬林

夏

立田川

立田川いつも流れ水よ波の上に秋風吹か紅葉の色

秋

宮城野

宮城野の秋のやとりをたつねきてはきかはなすり衣をむすふそらかな

深雪関

こえかぬる関のとあけて月さえてあさ風わたる雪のあけほの

冬

深草里

冬枯のしもおくまゝにふかくさのさとのあれまにすむ月の影

祝

春日山

三笠山みねのまつかせふきたえて千代のみとりをいはふなりけり

恋

二嶋江

みちのかけかけこひわたるあまのおふねをみるまゝにみちのおく

羇旅

清見潟

きよみかた月をみかねのはまかせもかよひて浪にいつる月かけ

述懐

浮田森

かくしつゝおもひしことはうきたの杜のしけきをみてもそらのうき雲

建久二年十月三日

已上十首依左将軍命詠之　安成督云々

左将軍は今の歌合也[illegible]首詠之

寄言思秋

人はみな秋のあはれにいふなれとしらぬ夕の[illegible]

連夜河霧

国立公文書館
National Archives of Japan

涼井のさくいつちかちさへ二川をすゝむらん松の音と神保

御しめぬそて岩のもみ　しらぬ紅葉と懐いたんもすゝむ

夢のみて紅葉りつ染てうへしよ夜とへしうならん

入日の影さへつれさ山の井乃あさくは袖のみつをみさ

夢さめてやさまいつもは行らの葉の絶ぬの花はゆらむ

雲山朝

吉野山絹に雲の鈎ならて霧の姿よ一つし神も

雲乃ちぎく花も家もゆるのくちきりをみよりけ山

夕早苗

早苗とれ雲の苗代も行りける月よ哉の毎の姿多

う邑ふる伏見乃小田の夕早苗行く水むく秋の袖乃

み月毎にすゝしれ苗の夕早苗とうよ露ふかき縁のゆ山田

行路秋

月も秋の都へ入出行旅人の足跡のうつりすゝむ紅葉

秋ゆふそてさけし雁乃行くるれし萩のも白雲山萩の月

暁時雨

雲乃その風も野中まで浮る遠き我里に暁なりし晴

夢覚そ海をかれそ夜袖の雨をよすかりたるのかぎる暁雨

松経年

ちとせ経てかれにむかしもかはらぬ待ちの年へてらる松

雲のはよもみとりつをんをもりて我世に幾世経ぬ

花鳥にかしみの人より百首よ詠をそ故にく

又百年をちぎりき成とほりし

雲

国立公文書館
National Archives of Japan

所々海てまくうて谷もと関をこえて行かむかへ雲出の浦
吉野山もとる雲の深き峯の遠く残るはまつりかれ
雲乃上に行きし空に山風は吹かぬとおもへのこりまつり

夕早苗

早苗とる夜あさ此頃の夕ぐれは海辺にそよぐ早苗の葉すゑ
秋ちかき相国乃此夕ぐれは早苗やそよぐ風のみなかに
田かへしさし緑なる小田の早苗の此夕ぐれに早苗東水風の秋の夜かな

行路秋

急ぎゆくさしもゆく山路は風そよぐ露にや物まで
旅の袖露もしほれし人ならで野の山の秋ぞかなしき

暁時雨

寝覚する暁の中の袖のうへに時雨のさびしき野時雨の空

松経年

住吉の松の緑も久しくて千代を風にかぞへて幾千世を経る

縁立前好歌

雲乗　前大僧正沙判

雲乃ゐる花の衣の袖のうへに月やあらぬとぬれしる人多

其暁

夜半の月まだ明けぬ山に法の声暁の鐘は深の絲

秋網

荻の穂のゆりしげり暮ゆく夜にそよぐ声や鳴

冬夕

大空の雲の冬の夕の絲にかゝりて年はへゆかす

冬の夕

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

のこる人附なそさへ三田山本ずゑよふかき秋ぞ山風
何ふる松さへ露乃ふかめて春みえて春風にたゝぬ
袖まて又木の葉もふかき花にも三田山まての秋ぞ落

詠三首和歌

春風不分處　　大僧正慈〡上

梢にもそむきし里の野山にも花にしられぬ春風ぞ吹

梅花薫暁袖

こゝろ移乃梅にかほる袖もかさね梅の香にそめ

暁露隔旅山

あけぼのにたちへだてゝ露にも旅のはやおきに
はれ行のちに山のはにかすみぞしるきみちのく
旅衣ぬれてぞ山のかげに袖ぞふかり

詠三首和歌

遠路網露

ふくかぜのはや道の春にかれけり露をかさねて

隣家采梅

春風のはやはるの梅もかほる袖にもかくて
梅の花の咲るかたに月かけて香をもたつね
へだてゝ山路のさきに村雨の春かぜにかへる

ふる人の年ふる山里に春かぜそふる

山家殘雪

山里にのこる村雨に春かぜのふるさとに白雪
山ざとに春もまたうちとけぬ雪の中の道

海上霞

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

清見かた波よりはらふ霧はれて雲の月にそ遠さかりける

月前風

さためなき風にさそはれ秋の風と更行月そさやけかりける

兼元九月廿四日清範奉書給三首題来廿八日於
日吉可立歌合可被参者　勅使之

寄月祝

君か代乃空に吹そふ松風も雲ゐにすめる月そみかける

寄旅恋

あふとみし夢さへさめて月の影のこる枕に袖そぬれける

のこしおく都乃月をもろともにわかれし人やなかめわふらん

美しき[illegible]にまよふ夜の月のかけ人のとかめにそてそ[illegible]

まちわひて[illegible]月の影のこる夜をかさねても[illegible]

寄山雑

いにしへの松の古木に咲そへる月もかはらぬ山の[illegible]

住のえの松のみとりもかはらねと[illegible]

君か代の月をみつへの松かえに千代をかけたる[illegible]

已上二首合點同廿六日そへて奉れ作也

歎三首和歌　建仁二年九月十三夜水無瀬殿恋十五首歌合判者被御之

月前秋風

月影のいつる嶺の雲のはれまより秋風さそふ山の端の月

秋の夜の月もさやけき山風に嶺の松原[illegible]

水路秋月

新玉のこの月くまなきつくはねの秋の夜ふかき影そすみける

暁月聞声

月影のもりてそみゆる山の色も秋ふかく染まさるらん

詠三首和歌　　信光

秋日易暮

はかなくもくれぬる空の色や郷に秋の哀のまさるらん

終夜擣衣

哀れさもまさるは暁の枕の哀につゝきかゝる乱

しら人のうらもめかし衣うつ袖に力の間のこゝ

毎月色恋

七夕の年の契の哀さも織月なるにつきもあへぬ

古寺秋風

世のひく声はいつも哀に聞ゆれと秋風に松

月前暁鹿

さを鹿の声の間に残る月ハ窓に山風さそふなり

虫聲増戀

松虫のおもひに袖の露はふけゆくともわかぬ秋の夜半

となりの人をつらきもあきさてつるまにかきそてて虫の聲

詠三首和歌

夜前薄暮

三笠山時雨そめけむ夜の色にまたきくれぬる夕暮の鐘

暁月

風ふけは川霧の川霧たちてまた明方の月

松風

高砂のをのへの時雨の庵に松風

松風に吹まよふ袖の雫の露にかはる窓の雨

詠三首和歌

寒夜冬月　　　前大僧正慈—

かうしもて露よれ月えさ比霜おちて鳴のきよく月新
みやこおもや露はひまくも枝もる枝のまゝ月の影も
花乃露と枯れし露よ比久て月しかへすまゝかた月は
乃への月露も空に新紙またあさちの露よこゝろ
めん

山家暮風

冬のゝ木枯よ梢よ嵐山ふかき里の松の夕は
うらやかに山乃ほとり夕嵐を時のやよ雲の之
と朝おもしろく嵐よあはれ浦山しくて紙まき

初恋

わの恋かおもき袖の夕附来てみをれに思
めてしはかわの恋草のまき夜は猶りそ浮沼氏

左大将家にて三首歌のよみくまてよみ侍りける

郊外初雪

夜のまにかくしみえつゝ初雪とけふぞ雪ふる

夕闇時雨

くらき夜は風をもしるしよそにして時雨ふらぬ雲の行衛は

晝夜思恋

ゆふしひと别れて後にしられけり今は夢にもおもひ初る

社頭冬月

一夜とて年ふりにける松の梢にもさえゆく冬の月

古池寒草

冬枯れてあれたる池に影をもなき芦の根の水

閑詞増恋

このもしきをこゝへつたへつるにうつしゝ時雨也けり

此外今日巳上三首静賢法印にかくしけれ

詠三首和歌

社頭松

先清水神のみしるしみえしれは新にそうつてなをそ頼む

みかき人のむかしのまゝの松山に君か千年をかけてまもらん

さゝくしき君かこの千年とまつ山にいく代をかさねておもふらん

月前雪

路つもる雪まのきえて春たゝ山風吹のてる清夜をもる新

冬の月佐保ゆく山まつ雪とや清くてる夜をもるらん

旅宿嵐

乃急ぬるきぬをかたしく紙衣をはらふ旅枕かな

露わけて行里人の瑞籬に乞し袖の宮の露のこと

あふの藤わかれをしてあまた深きの音信こゝし

詠三首和歌

暁尋千鳥　桑門慈悦

冬の夜の月に明ぬる河風に声そなきつる浜の千鳥哉

山家知雲

山里は雲井のよそにかゝる谷の梅か白雲きえてかく

海邊歳暮

かきくれて昨日はけふの年くれて和歌の浦わにかへる

山居春曙

吉野山花の雨をしたひて桜の梢にまたかゝる

かつ花山月にかゝる衣の袖にみちていく夜をかさね

みよし野の山のはかすむ花の梢のかすみのかの

いやんとてそ山花まちに花のかゝりくる書經
山陰とらうちもみ嶺にみて書紀念の夜の宮

水辺秋月

誰かゆく白浜の旅寝みれは此の夜のまねの露秋の夜の宮
わくらはに花より来る月にうつりて昨夜の梅のは
うみのいつはれ秋の夕附ふさこに竹の月影
仍て出てや浮かふ夜のまゝに秋の夕くれ
誰か此のやかりかなるに秋さまれみ秋のまよ夕ある夕の夜
此すくすまふうち比山の神の霧の影もゐる人の懐
秋のみよまゝの山に高く出て吉野の夕霧の夜

羇中晩望

我おもふみちはとまりもよしやえるはまに此の

旅の夜いくつのをゆきみえぬ人もさまの山の嶺
我よみさはよ風立秋の夕に以て御代しぬる
東海や打て松みつのうち旅のみたからのまゝ
さけふまつえかはやまの嶺とみなかふつきをまゝ
何の旅し一筋して立ち帰るまりめしてみちのえの
さふの海や月に浮かれてねよりそふれを摂山
月の入るかたの山とあふさかて秋のあはれ篠原
りわさまのつさけ北浦に入月のふの夜六浅後の西山

詠妙經法師功德悉見三千界文和歌

前大僧正慈—

清き波瀬の秋のさもや勝みのりまによれ遠くに見えぬ月影

副詠 寛永二六月稜

さもこそは川せの浪しらよるはつれなき手もさへさらす夏はなかりき

毎日納涼

すゝむとてむすふしみつのあまりにて所からなる松かせのよは

上人勧進結縁四十八首之序同詠三首和歌

弥陀四十八願 第六明遍見極楽衆生之願也 西山隠士

かゝみともすゝむる法の浄土をは我身にうつす月のかけかな

月

ひとゝせの山のはにこそ残りけれ入ぬる後もあかぬ月かけ

無常

とりへ山やけの煙もたえまなくあすはわか身の後をしるらん

我もいつなき人数に入ぬらん我袖ぬらす後のよのうき

春日舎利講演次同詠十如法文和歌

前僧正慈―

如是相 とみるからに指も織城及樹のけす仏舎利

如是性 のうちにこもれるあきのこゑ仏性とこそいふへかりけれ

如是体 東大寺のうちの盧遮那仏はすかたをみせて大塔建立長

如是力 み世の仏もさとりをゆるさすちからをつくす

如是作 よしなくものをおもひつゝ我すむ宿の春の夜の月

如是因 如是字乃義を此法にあらはしてこそ我宿の月

如是縁 よくはれし仏縁をおもひわくあつきわれらか心

如是果 如是女こそとりつくすところにかなしき秋の月

如是報 如是本末究竟あるよしもあらはれて本より空の花の色

如是相 をみるそのかきりにはあらはれて

如是作 をみるそのかきりにはあるへきものを

如是之相 春

吉野山みねの花をみわたせハ山ハさなからしら雲

性如是 夏

夏の池にはなかりしをのあはれそうつりにそめる花もさきぬ

躰如是 秋

月にもなほ心ハしかれ風ならぬ宿ハ秋なきすめる身なれハ

如是力 冬

梅の花にほふはなかりけむ雪にさへ梅の花ある

文治六年二月九日西山鉄悲海ニ具足戒

雪ハりはなの梅のおくとさむきしくれてみゆるかなゆき

霞中閑居

さとしらぬ山ふかき住居の霞こそ思ふ心の庵にもひとりなれ

詩境独意

作わかれぬ秋乃月にもなかめぬハかはらぬはるのなかめそ

長秋當座

後會契花時

又こむと契る花の盛にかならすと人をまたれし

尋所縁恋

むかしみし宿のゆかりを尋ぬれハかたみの袖に秋風そふく

柳為寺墻

隔若恋

さみたれのゝ野との墻に柳ハそれとなるものそ

かゝる花見て川よ袖ぬれて山ぬさ成ゐて来かへし

羇中待花

鳴さえぬ山路乃花をまちわひて頭の雪は積り行らし

同三月九日報恩講

皆已成佛道

さかぬまも世乃花の色もまた同し佛の縁となるへき

毎山花盛

春ことに四方乃山ゝ花に錦えてみかきの花と見へけり

夜半喚子鳥

一人寝乃枕にきこゆ呼子鳥たかことさゝや夜深くに鳴

當座十首

依花忘行

春くれはしはし花にひかれて旅衣けふも日数のへぬるかな

遠方藤花

なかめやる梢の藤の色かとそ盛なりけるよそにてみる

数多交路

いかにせん人の行末いつくにか岩ねの道ハ分かぬなり

隣燭留人

くれかけの夕の月を待兼てとまりし旅の宿をとふ

旅泊春雨

湊川よそ乃旅寝もみそほるゝ春の雨をきくらむ

一夜懸恋

玉章乃まよひの中と成へしや中て無きゆかりなるらん

老後無常

ありてしらぬの哀れに今さらに消りつも我もいくらの世

山家述懐

住このさかりに世をはなれし果我やそれしもさびしさ

不敬生戒

うけみは我咎とつもてそちの戸のもとに我ものとふ

社頭遇友

ときはなるもののふの人よわすなと思くるみし花川邊ん

同三月廿四日靜房観恩講

舎利廣流布

来乃世の色并海て出し新しき廣くよろこぶ遠しみら

さのひ海台

仙人たちのみちの乃様に我をも引とりて日本ことも

建久二年十二月廿日觀恩舎利講にて

あかしてる法の中にはわかるの

鶴林遷舎利講述懐

とりあへくむくひわくにも誓を遠くに見むかるよ

別題山家冬月

月影は秋のしらぬの冬ごもり庭のまの梢に法の橋

同年佛観恩講之次和歌

皆己成佛道

法乃もとちまりしにいまもまたみな佛とそなる

菩庭秋月

むし人能さきのまに法の庭よ月をしめす新のさまる

同八年二月観恩講よ

鶯

三川のすむ片岡山のあさぼらけ一村竹にむら一声

山

我山は深きの法のしらぬ人もありしを昔読めなりとは

是諸経之王

三乃法乃二とらわ海の三乃上人す水上人まちなるを

同年報恩舎利殿宝文を

月

かのみ月もきのさそらすんいひこめ人満ちぬる月ゆると

同報恩講舎詠勧持品和歌

前大僧正慈鎮

須まの雨ちまた花のこは月をさ人へ観れはまつらさくらは

山家 懐旧

いまさらの花のまたしきに桜みえても動く心も風の嵐を

報恩舎詠二首和歌

五百弟子

四此山ちよふるまでひけば鮮人へみえぬ若葉

御判

山家祝言

冬人ぬ松かつら山の高き峯の中の年を祈る

舎利報恩講讃法師功徳品和歌

老僧御判

いはほこそ法のをしへにたえぬるもの色の猿みえぬ人見るさ

別詠歳暮述懐

年ぬるやかの袖よりそあそそのかつらさし行末の松山

七

歳暮歎老命短謳随喜功徳不和歌

老病僧御判

かれもの命の末れるよそよ[illegible]

御前述懐

是をこそしのひ[illegible]

歳暮舎利報恩命短謳常不将芥不和歌

春乃田[illegible]

祖頭述懐

[illegible]

歳暮舎利報恩命短謳〻分別不和歌

御判

[illegible]

年[illegible]

窮冬良辰之作於当社十禅師宝前勤行

舎利報恩命之次謳海常不将芥不和歌

老僧益―

春乃田[illegible]

祖頭述懐

[illegible]

文治六年二月十八日山王講

無上宝聚不求自得

[illegible]

山苑所開

[illegible]

同 増運

心[illegible]

建久元年九月十三夜九条家二題百首

次[illegible]

雨後十三夜

[illegible]

月前契秋後

[illegible]

[illegible]

秋末思出恋

[illegible]

同月廿二日歌合 百首次 被撰名十首 之次有南殿之歌合

勝 [illegible]

[illegible]

時雨[illegible]

山路後夜逢 被書勝乎

持 [illegible]秋暁恋

[illegible]

此歌持

[illegible]

同廿四日又歌合敵下有会

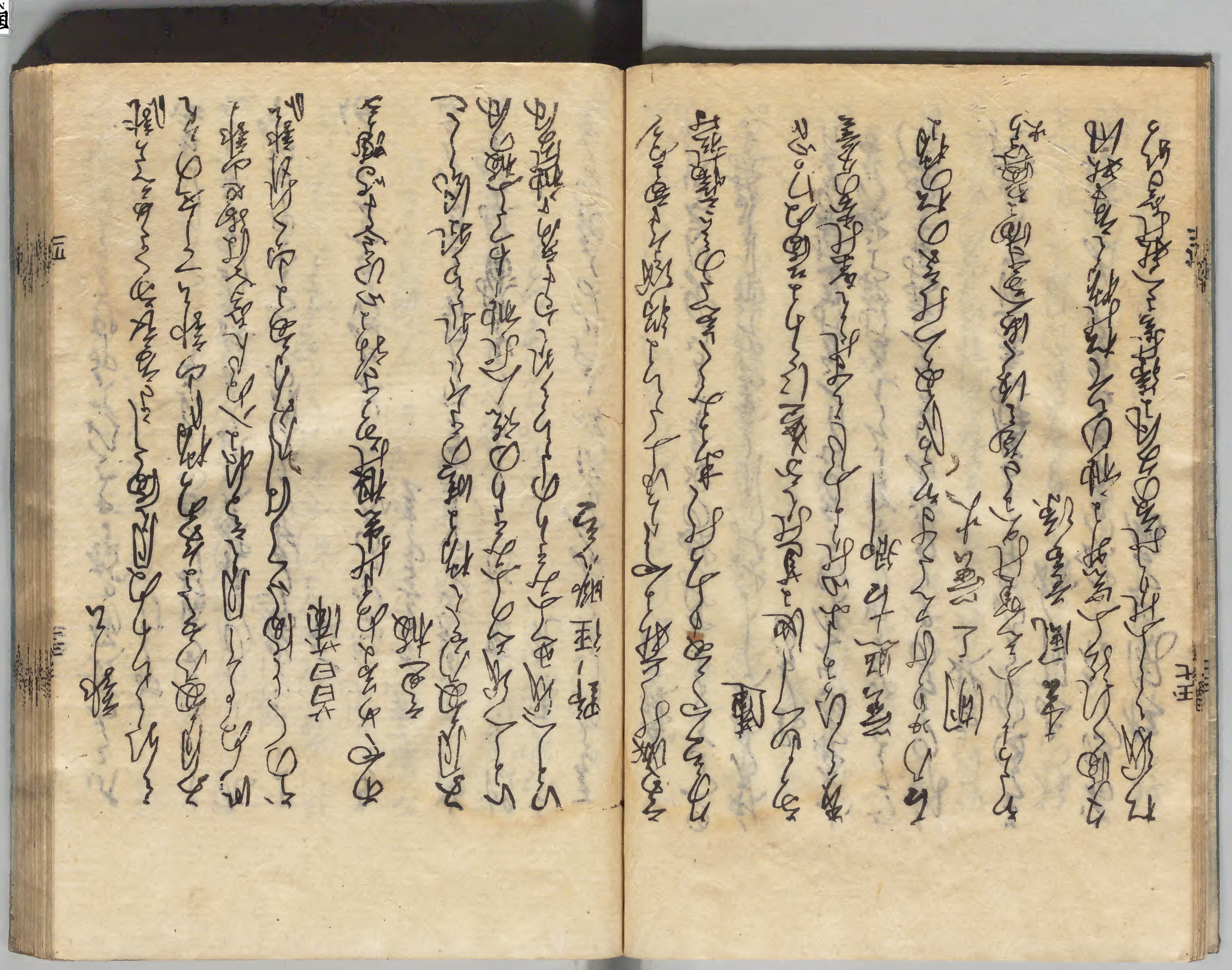
勝 秋日[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

月はなを山のはちかくのこりけりあはれやいつか世をはなれまし

照さらん陰はあらしな秋の月こゝろのやみのはれぬはかりを

たゝ頼めそれをもしはし秋のよの月にかはらぬ山のはの空

世をそむく人はみな照る秋の月かけのしるへと出る山の端

月ゆへにさらはかなしき世のうさもなくさみにけり秋の夜な夜な

月ならぬさへかなしきうき身にはけに心からなみたなりけり

秋の夜の月のほかにもよの中はうきをしのふるかけのみちしは

さらにまたいつか見るへきよはの月かけもしのはん世々の面影

月はよしいさよふ雲の絶まより君か千世まてすめる影かな

秋の夜の月影うつす氷にも君かよはひのかけそさやけき

林中暁月

見しまゝに梢の山は木かくれぬ月をのこして明るしのゝめ

深山暁月

月のこる峯の梢のふかき山さひしさまさる在明のそら

暁天聞鐘

山寺のあかつきかたの鐘の声ねさめてそきく夜をのこしつゝ

槿籬猒夕

夕されはかきねのあさかほしほれつゝまつにかへらぬ花そはかなき

秋旅

しらさりき君か住家をたちはなれ旅ねの空に秋をへんとは

旅のそらわけてかへらぬ一夜のかりねのまくらなみたなりけり

九月盡

いかにせむ今はくれぬる秋なれとさらにしのはん神無月かな

あすよりは秋のなこりのしのはれてたれにとはまし時雨ゆく空

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

川

義く我山川乃岩波と心よみて浮世をも各ん

瀬

きよ夜川ゝゝを山よわたしゝ川世の我まゝ我瀬我泉

山家

さむしろや枕の泉よ志つゝ我流ゝ聖我流よ義よ

松

義しやむかしきらん終の我松み乃枝我まさよ

苔

山川我枕ゝゝさまん岩の日よゝゝの苔をとて絶

山川乃岩我さかよ袖我の我て苔わ苔の泉よ

苔の人ゝの我れ乃我なとゝれゝや苔我下ゝゝゝゝみは

鶏

曲の日継我志のゝもゝかな人の我宿我夜の八聲

曉更鶏

れゝ乃浦よ月影とゝの絶明よわゝ人我ゝ我声をいさ

我乃雨よとれゝも我我さゝそ子とさよゝの我暁の多

雑

よゝ人海我人ゝ中く浮我我と義よ我我ゝ志ゝゝ

友

多く二人よのむゝ我の中ゝゝさきゝ我とみなよ多

花や月我ひりなゝ我情を宿ゝれよゝ我よ我我

神祇

立ゝ人我世と神ゝゝゝや我我我みまゝ我川我ゝの我

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

千とせ迄万代迄も宝りて極まる十廻花咲て霞て
見ゆる代は千代は君まよひ文みよみまさ道芸守

跋

君か代は千年くもらぬ紙せきもかきつく誰か浦松隠

和尚御詠類聚事

度々御百首泰暦之比類聚已訖今
取彼懐紙雀旧草自然撰作諸人贈答
等也重集之御翔子九令清書畢先
年云始之後経十九年其間天下変
革世上騒乱哉而今書俗書写
書不紛散金玉篇什重終書写
併足護法天台之眞助祖師和尚之
擁護也不堪欣悦聊述由致于時貞
和二年五月廿三日吉水末流尊円親王
記

翔子九本追之時雙紙裏紙之書付一首

かくなむ枝さきてこの花浦よ咲るしはなむ
古代日の月さや代のつれまよきて人さき行あれ遠法之

此拾玉集者申請竹内門跡
御本七冊書写之処不審繁多
也仍申出青門御本五冊再三
比校而正烏焉之差誤尤可
為證本者也

文禄第三暦林鐘初二
丹山隠士玄旨 在判

二條通衣棚
京都書肆
風月莊左衛門

国立公文書館
National Archives of Japan